

現代大学生の職業選好に関する計量的分析

——島根大学調査データをもちいて——

山本 圭三

YAMAMOTO Keizo

1 はじめに

現代日本において、若者の労働をとりまく環境は決してよいものとはいえない。「新卒者の就職率は悪化している」という言説は、疑いようのない現実として多くの人に認識されている。「フリーター」「ニート」といった言葉がこんにちの新聞や雑誌の紙面をにぎわしているのも、その証拠だろう。玄田有史の言葉を借りれば、現在の若者は長期的に継続する構造的現象となりつつある雇用機会減少のただ中にあるのである（玄田 2001: 52）。

本稿は、このような就職を控えた若者、特に大学生に焦点をあて、彼らの職業選好¹⁾にかかわる要因を明らかにしていくことを目的とする。先に述べたような現代の雇用状況の中、若者の職業選好について考えることは意義があると思われる。

職業選択に関する研究はこれまでに数多くなされており、多くの職業選択要因がとりあげられている。本稿では、これらの中でしばしばとりあげられる属性や意識だけでなく、本人が職業にどういったもの（例えば、経済的安定性や社会的責任など）を求めるといふ職業価値志向に注目する。職業価値志向を含めて検討するのは、これまで扱われてきた属性や意識だけでなく「職業に求める特性」という意識も労働をとりまく環境の変化に左右され、それが職業選好に大きくかかわると考えられるからである。

以下では、筆者が2003年に島根大学で行った

調査²⁾をもとに、分析を進めていくことにする。具体的な分析に入る前に、次章で過去の研究を整理しておこう。

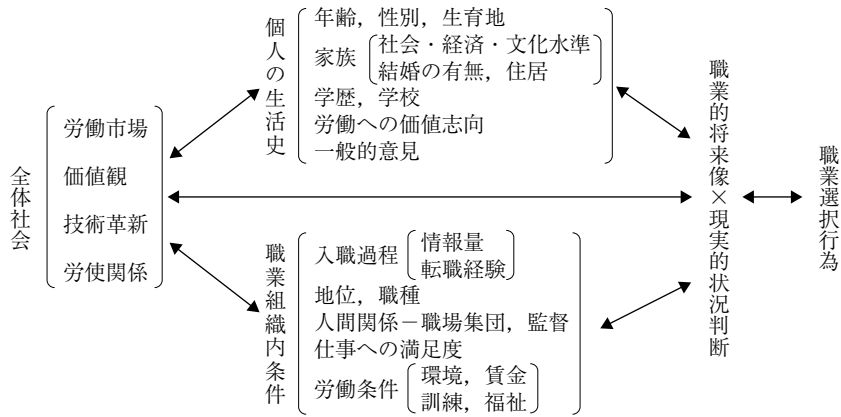
2 先行研究

2.1 職業選択理論

まず、職業選択理論をまとめた研究をとりあげ、本稿が職業選択理論のどこに位置づけられるかを確認しておこう。土井聖陽（1996）はクライツの類型に倣い、職業選択理論を①非心理学的職業選択理論、②心理学的理論、③一般理論の3つに類型化している。この3つはそれぞれ、①個人の外的要因を強調するもの、②外的要因でなく個人自身の要因を強調するもの、③職業に対応した個人のパーソナリティを強調するもの、であるとしている（土井 1996）。

また、片桐雅隆（1976）は、「全体社会」、「職業組織内条件」、「個人の生活史」、という3要素を含んだ枠組みを用いて、職業選択理論をまとめている（図1）。

片桐は、これら3要素が個人を一定の職業にかり立てる諸要因であり、「個人の生活史」はパーソナリティ論に、「職業組織内条件」「全体社会」は社会構造論によってそれぞれ議論されてきた、としている。その上で彼は、職業選択理論の議論展開の中心となってきたのがパーソナリティ論であり、社会構造論はこのパーソナリティ論の批判的方法として展開されてきたもの、と両者を位置づけている（片桐 1976）。



出典：片桐（1976）、図1

図1 片桐が用いた枠組み

本稿では、大学生の職業選好にかかわる要因として、一般的な属性や意識に加え、職業価値志向をみることにした。したがって本稿は、片桐の枠組みでいう「個人の生活史」に含まれる年齢、性別、生育地、労働への価値志向を検討するものと位置づけられる。

2.2 大学生の職業選択

本稿では、若者の中でも特に大学生に焦点をあてて分析をおこなう。ここでは、大学生の職業選択に関するこれまでの研究ふまえ、本稿での立場を明らかにしよう。

大学生の職業選択に関しても、心理学や社会学で多くの研究（安達 2003, 2004；藤森 1983；安田 1999 など）がなされている。このなかで、職業に何を求めるか、という職業価値志向については、若林らの一連の研究（若林ほか 1983, 1986, 1989）が詳しい。

若林らはスーパー（Super）らの研究をふまえ、本人が自分の仕事に求める重要な条件をたずね、こうした「本人が自分の仕事に求めるもの」を職業志向と定義している（若林ほか 1983）。彼らは女子学生におこなった調査の中で、就職の際に求めている30の条件³⁾をたずね、これを主成分分

析した結果、「職務挑戦」「人間関係」「労働条件」の3軸を得ている。この3軸を職業志向尺度として、事務的専門職、服飾・商業美術職、販売・現業職、医療・社会福祉職、マスコミ職、窓口サービス職、教育職、語学専門職といった、8つの職業に対する興味との関連を検討し、その結果、教育職には人間関係尺度と労働条件尺度が正に、販売・現業職には職務挑戦尺度が負に影響し、事務的専門職に職業志向は影響しない、といった関連を明らかにしている（若林ほか 1986）。

本稿は、この若林らの研究をより正確にするものである。若林らの研究では、対象が女子学生に限定されており、学生全体を扱う議論はなされていない。また、職業興味に関連する変数として、学校生活経験や家庭でのしつけ、性別役割意識などが同時に検討されているが、性別や地域などの属性要因の影響までは検討されていない。したがって、本稿の後の分析でこういった不足部分を補いつつ再検討することによって、より緻密な議論をしていくことができる。

2.3 職業の分類について

前節までで、本稿がどういった位置づけにあるかをおおよそ確認することができた。しかし、職

業選好をみていくにあたっては、さらに職業分類に関する議論も検討する必要がある。

職業分類全体を大まかに示したのとして、岡本英雄（1979）の議論がある。岡本はこの中で、職業分類の目的は「統計の記述」「職業紹介・職業指導」の2つであると述べ、日本標準職業分類（以下、標準職業分類）、社会経済分類、SSM 総合職業分類（以下、SSM 分類）に関して、それぞれの職業分類の特徴を挙げている（岡本 1979）。

岡本によれば、各職業分類の特徴は次のとおりである。「標準職業分類」の特徴は、「個人が従事している仕事の種類を基準としつつ、各職業の社会・経済的な特徴も併せて考慮している」点である。これに対し「社会経済分類」、「SSM 分類」は、「より正確な社会・経済的グループを描き出す」という特徴をもち、「社会経済分類」は職業分類と従業上の地位を、「SSM 分類」は従業上の地位・狭義の職業・企業規模を、それぞれ組み合わせで作成したもの、とされている（岡本 1979）。

さて、これまでの職業選択の研究では、いくつかの職業に限定して議論がなされたり、既存の職業分類がそのまま用いられたりすることが一般的である⁴⁾。

しかし実際には、若者たちが職業を選ぶ際はそういった分類にとらわれていない。むしろ、本人の許容範囲に収まる職業群から選んでいる、といったほうが現実的だろう。すなわち、選択する側にはそれぞれの分類があるのである。岡本が「我々の社会に適した分類をつくる必要がある」（岡本 1979）と述べているように、大学生の職業選択を扱うには、それにみあった分類が必要であると考えられる。

3 職業選好と職業価値志向

3.1 「就きたい」職業の構造

(1) 職業選好をもとにした職業クラスタ

これまでの研究をみてきて、職業価値志向、職業分類とも再検討の必要があることがわかった。ここから具体的な分析に入っていくが、まずそれぞれの構造を明らかにすることからはじめよう。

大学生は、職業選択の際に既存の分類にとらわれていないことは既に述べた。そこで、新しい基準による分類を試みよう。本稿では、新しい分類の基準として本人たちの職業選好をもちいる。すなわち、本人たちが「就きたい」と思う度合いの類似性から、職業を分類していくのである。

筆者の行った調査の中では、具体的な36の職業⁵⁾について、「就きたいと思う」「就いてみてもいいと思う」「就きたくない」のいずれかを選んでもらっている。本稿ではこの回答を本人の職業選好とし、これをもちいてクラスタ分析⁶⁾による分類をおこなう。クラスタ分析のデンドログラムを示したものが図2、得られたクラスタの構成を示したのが表1である。また、比較対象として日本標準職業分類、SSM 分類を表2に示している。

(2) 分析結果

今回は、職業クラスタが12得られた段階（距離13.569）で結合を終了した。以下で、分析の結果をおおまかにみていこう。

公務員系クラスタは、特に目立った特徴を示している。早い段階でクラスタが結合された、すなわち選好がかなり類似しているのは、国家公務員と地方公務員、小売店員と飲食店員、電気工事と建設工事などであった。これらそれぞれの職業に対する選好は、特に違いが意識されずほぼ同じように考えられているようである。この中でも、公務員系クラスタは2つでクラスタを形成し、他と

*****HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS*****

Dendrogram using Average Linkage (Between Groups)

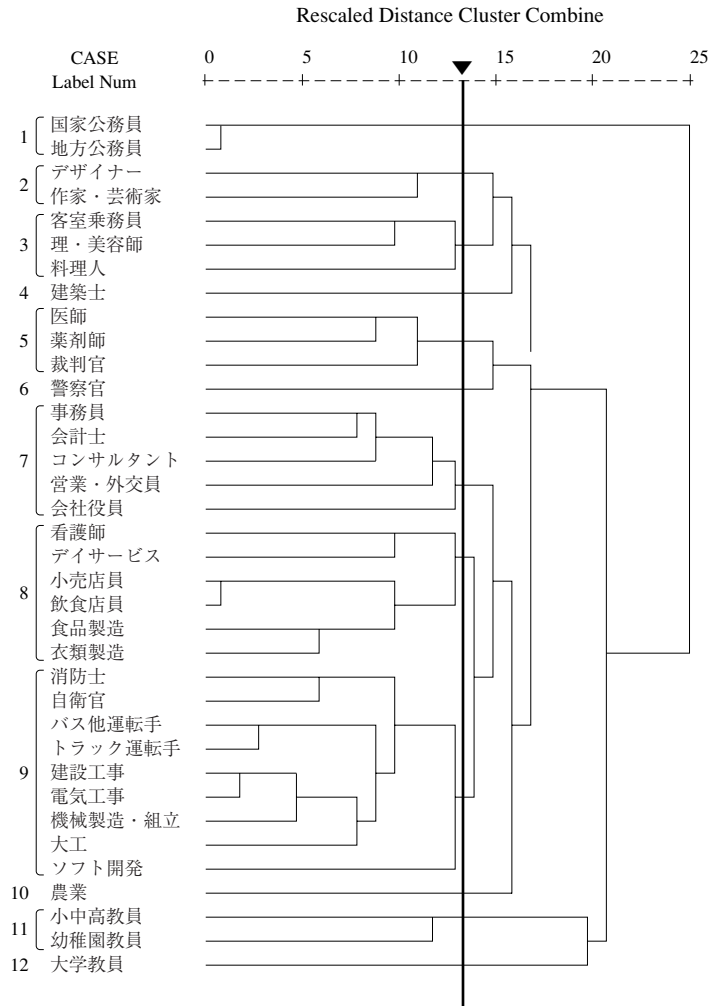


図2 クラスタ分析のデンドログラム

は最後まで結合されない。すなわち、公務員系クラスタの選好は、他の職業クラスタの選好とは大きく異なっていることを意味している。

芸術系クラスタは、デザイナーと作家・芸術家で構成されている。これらの職業は、一般的な常勤職とは少し異なる職業、という点で同じように考えられている。

技能系クラスタは、客室乗務員、理・美容師、

料理人で構成されている。これらの職業は、仕事をする上で専門的な技能・技術が重要になる、という点で類似していると考えられる。

プロフェッション系クラスタは、医師、薬剤師、弁護士で構成されている。収入や威信が一般的に高い、と考えられている職がまとめて1つのクラスタとなっている。

事務系クラスタは、事務職だけでなく役員など

表 1 職業クラスタの構成

職業クラスタ	職 業 名
1 公務員系	国家公務員、地方公務員
2 芸術系	デザイナー、作家・芸術家
3 技能系	スチュワーデス・客室乗務員、理容師・美容師、料理人
4 建築系	建築士
5 プロフェッション系	医師、薬剤師、弁護士
6 警察系	警察官
7 事務系	営業・外交員、経理・人事・総務事務員、会計士・税理士、経営コンサルタント、会社役員
8 製造・販売・サービス系	小売店の店員、飲食店の店員、食品製造、衣類製造、看護師、デイサービス・ホームヘルパー
9 現場系	消防士、自衛官、バス・電車・タクシーの運転手、トラック運転手、大工、機械製造・組立・修理、建設工事、電気工事、ソフト開発
10 農業系	農林漁業・畜産業
11 教育系	小・中・高の教員、幼稚園教員・保育士
12 研究系	大学教員・研究者

表 2 日本標準職業分類・SSM 分類

日本標準職業分類（大分類）	SSM 分類（安田分類）	SSM 分類（原分類）
専門的・技術的職業従事者	農業層	専門的職業
管理的職業従事者	自営業層	管理的職業
事務従事者	専門的職業	ノンマニュアル自営業主
販売従事者	管理的職業	マニュアル自営業主
サービス職業従事者	大企業ホワイトカラー	大企業事務職（販売含む）
保安職業従事者	中小企業ホワイトカラー	中小企業事務職
農林漁業作業者	大企業ブルーカラー	中小企業販売職
運輸・通信従事者	中小企業ブルーカラー	大企業熟練
生産工程・労務作業者	農林漁業賃労働者	中小企業熟練
分類不能の職業		大企業半熟練・非熟練
		中小企業半熟練・非熟練
		農業職

を含む多くの職業で構成されている。屋内での事務的作業をおこなう、という点で同じようにとらえられているようである。

製造・販売・サービス系クラスタは多様な職業からなり、最もまとまりがないクラスタである。あえていうならば、人と接する機会のある職業として類似している、と考えられなくもない。

現場系クラスタの結果は、非常に興味深いものである。図 2 のデンドログラムを見ると、まず建

設工事・電気工事と機械製造、大工などいわゆる現業職が結合し、その次の段階で消防士・自衛官という保安系職業と結合している。これらの職業に対する選好は、現場での仕事という意味で同じようにとらえられている。ただし、食品製造・衣類製造、警察官などは、現場系とは別のクラスタに含まれている。同じ現業職や保安職であっても、食品・衣類製造と機械製造、消防士・自衛官と警察官では選好のされ方が異なっている、とい

う点が興味深い。

教育系クラスタは、小中高の教員、幼稚園教員・保育士で構成されている。これらは、高等教育機関とは別の、「学校」にかかわる職業、として考えられているようである。

上記以外の建築系、警察系、農業系、研究系はそれぞれ単独でクラスタを構成している。大学生たちは、これらの職業を他とは異なる別のものとして考えているようである。

(3) これまでの分類との比較

前項では、各職業クラスタの構成をみてきた。次に、得られた職業クラスタと表2の職業分類を比較し、職業クラスタの特徴を明らかにしよう。

まず、標準職業分類との違いからみてみよう。大きく異なるのは、先にもふれた現場系の部分である。現場系クラスタには、標準職業分類でいう生産工程・労務作業、運輸・通信従事者、保安職業従事者の多くが含まれる。大学生にとっては、これらは屋外の現場で作業をする仕事としてまとめて考えられているのである。また、今回の分析では専門的・技術的職業従事者にあたる部分が、少し細かく分けられていることも目立っている。専門的・技術的職業従事者に含まれるプロフェッション系、芸術系、教育系は、職業クラスタではそれぞれ別となっているのである。これは、今回の調査データが4年制大学の学生を対象としていることに起因していると思われる。一般的に、彼らは高い学歴をもち、このような専門職につくことが比較的多いため、専門職の中のより細かな違いを意識しているのではないかと考えられる。さらに、職業クラスタに「管理的職業従事者」の分類がないことも指摘できる。質問のなかには、「会社役員」という管理を表す項目もあるが、事務系に含まれている。結果として、得られた職業クラスタには、「管理的な職業」を表す分類がない。このことも、大学生のデータに特有の

結果だと予想される。大学生がこれからつく職業は、はじめてつく職業である場合がほとんどである。現実的に考えると、初職で管理的職業につくことはあまりない。このため、大学生の職業選好では「管理」はあまり意識されていないのではないだろうか。

次に、SSM分類との違いをみてみよう。岡本の言及にもあったように、SSM分類（安田分類）は、従業上の地位・狭義の職業・企業規模を組み合わせて作られている。また、原分類では、安田分類よりも職業間の地位・役割の格差をより明瞭にするために修正が加えられたものである（安田・原 1982）。本稿の職業クラスタに「管理的職業」がないことに関しては、先ほどの繰り返しになるのでここでは省略する。その他にも、職業クラスタには従業上の地位や企業規模という観点が含まれていないことや、ブルーカラーの分類はSSM分類、特に原分類のほうが細かいことが違いとして挙げられる。前者の問題は、職業クラスタでは仕方のないことだといえる。というのも、質問自体に従業上の地位や企業規模をあらわすものを設けていないからである。後者に関して、確かにブルーカラーはSSM分類のほうが細かいが、そのぶん職業クラスタはSSM分類よりもホワイト職・専門職の分類が細かい、と指摘できる。

職業選好に基づく職業クラスタは、以上のような特徴をもったものである。4章以降でおこなう職業選好の分析はこの職業クラスタの分類を用い、職業クラスタの選好をみる形で進めていくことにする⁷⁾。

3.2 職業価値志向の構造

(1) 若者が職業に求めるものをとらえる

次に、職業価値志向について考えてみよう。本稿における職業価値志向は、概念的には若林ら

(1983, 1986) の職業志向と同じものである。ただし、先に述べたように若林らの職業志向も再検討の余地がある。若林らの職業志向を詳しくみると、「職務挑戦」軸に非常に多くの項目が含まれていることがわかる。具体的には、仕事の特徴をあらわす項目や能力を発揮する機会に関する項目、経済的な報酬や社会的評価に関する項目など、合計で 14 もの項目が含まれているのである。

本稿では、この点について、①本稿では能力を発揮する機会にあたる項目はあつかわない、②活動場所、活動する場合の他者との接触、仕事上主に相手にする対象に関する項目を新たに加える、という方針をとることとする。①の方針をとるのは、能力を発揮する機会は、仕事の性格や報酬・評価よりも職業未経験者が実感しにくいと思われるためであり、②の方針をとるのは、活動する場所に関する項目や人と接する機会も、職業を選ぶ際には重要な要件となりうると考えられるためである。

最終的に、筆者の調査では職業価値志向について以下の 11 項目がとりあげられている。まず、自分の職業に求めるものとして、A「収入が大き

いこと」、B「安定した収入が得られること」、C「人から信用される職業であること」、D「人から‘えらい’といわれるような職業であること」、E「社会的に負う責任が大きいこと」、F「職を失う心配がないこと」のそれぞれについて、「重要である」から「重要でない」までの 5 段階でたずねている。また、職業に関する意見として、G「物を作ったりするような仕事よりも、人を相手にする仕事のほうがいい」、H「みんなと共同でやるような仕事よりも、一人でこなすような仕事のほうがいい」、I「専門的な知識を必要とするような仕事よりも、そのような知識を必要としない仕事がいい」、J「事務所（事業所）の中でずっとやるような仕事よりも、事務所（事業所）から出かけてやるような仕事がいい」、K「毎日同じような問題を処理する仕事よりも、違った問題を処理する仕事がいい」について、「そう思う」から「そう思わない」までの 5 段階でたずねている。ここではこれらの諸項目⁸⁾を用いて、新たな尺度をさぐっていく。

(2) 分析結果

当該項目について、主成分分析をおこなった結

表 3 職業価値志向の主成分分析

職業価値志向	項目／主成分	1	2	3	4	5	6	7
経 済 性	(B) 安定収入－不安定	0.893	0.038	-0.015	0.065	-0.013	-0.084	-0.025
	(A) 収入大－小	0.825	0.096	0.093	0.137	0.056	0.061	-0.004
	(F) 安定雇用－不安定雇用	0.772	0.099	-0.142	-0.015	-0.079	-0.084	0.021
責 任 性	(E) 責任大－小	-0.019	0.825	0.016	0.016	0.113	0.046	-0.043
	(D) 威信地位大－小	0.244	0.800	-0.119	0.110	-0.116	0.010	-0.034
	(C) 信用大－小	0.066	0.691	0.250	-0.280	0.212	0.031	0.044
対 人 性	(G) 対人－対物	-0.054	0.045	0.961	0.084	0.015	0.037	-0.104
専 門 性	(I) 専門－非専門	0.147	-0.032	0.087	0.955	0.007	-0.039	0.006
オフィス外活動性	(J) オフィス内－外	-0.028	0.123	0.017	0.003	0.961	0.167	-0.040
ルーティン性	(K) ルーティン－非ルーティン	-0.085	0.063	0.039	-0.040	0.166	0.976	-0.012
共 同 性	(H) 個人－共同	-0.007	-0.037	-0.100	0.005	-0.037	-0.011	0.991

注：7 主成分で全分散の 83.03% を説明している。

果を示したものが表3である。表から分かるように、先の11項目は7つの主成分でほぼ説明されるようである(83.03%)。第1主成分は、収入・雇用の安定性・収入の大きさといった項目から構成されているため、経済性をあらわす軸だといえる。第2主成分は、任される責任の大きさ・威信地位・社会的信用の項目からなるため、社会的責任をあらわす軸だといえる。これらの2軸は、その仕事をすることによって得られる経済的報酬・社会的評価に注目した軸であるといえよう。他の主成分は仕事のもつ特徴に注目したものであり、各軸が1項目で構成されている。各軸はそれぞれ、対人性、専門性、オフィス外活動性、ルーティン性、共同性を表している。

大学生が自分の職業に求めるものは、このように7つの軸で表される性質である。本稿ではこれ

らを職業価値志向とし、以下の分析でもちいることとする⁹⁾。

4 職業選好の基盤

4.1 属性・意識と職業選好

(1) 属性・意識によって選好に違いがあるか

前章までの分析により、職業選好に基づく12の職業クラスタ、7つの職業価値志向が明らかとなった。ここからは、職業選好が何に影響されるのかをみていこう。

まず、年齢、性別、地位アスピレーション¹⁰⁾、出身地域、大学での専攻¹¹⁾、自営一雇用という希望就業形態¹²⁾といった属性・意識変数が職業選好にどう関連するかをみる。また、本人の選好に対する親の影響として、父親の学歴¹³⁾、父親の職業も検討対象とする。表4は性別、出身地域、専

表4 属性・意識による職業選好の違い(平均値)

		公務員系	芸術系	技能系	建築系	プロフ ェッシ ョン系	警察系	事務系	製造・ 販売・ サービ ス系	現場系	農業系	教育系	研究系
全体平均		2.375	1.764	1.724	1.798	1.648	1.705	1.580	1.555	1.401	1.648	1.934	1.867
性別	男(136)	2.346	1.699	1.602	1.882	1.662	1.794	1.573	1.549	1.565	1.816	1.868	1.985
	女(128)	2.406	1.835	1.853	1.709	1.633	1.609	1.587	1.562	1.226	1.469	2.004	1.740
	有意確率	0.482	0.107	0.001	0.065	0.711	0.052	0.804	0.799	0.000	0.000	0.114	0.013
出身地域	市部(175)	2.391	1.750	1.736	1.783	1.691	1.737	1.598	1.554	1.426	1.606	1.894	1.797
	郡部(80)	2.338	1.744	1.696	1.823	1.567	1.675	1.515	1.551	1.363	1.750	2.025	1.858
	有意確率	0.569	0.946	0.630	0.700	0.151	0.552	0.176	0.958	0.288	0.159	0.165	0.424
専攻	文系(119)	2.466	1.847	1.866	1.714	1.667	1.689	1.626	1.561	1.255	1.319	2.088	2.007
	理系(143)	2.297	1.703	1.615	1.873	1.636	1.720	1.535	1.553	1.517	1.923	1.811	1.866
	有意確率	0.051	0.089	0.001	0.094	0.701	0.746	0.118	0.879	0.000	0.000	0.001	0.002
父学歴	初等・中等学歴(111)	2.387	1.793	1.739	1.791	1.649	1.739	1.566	1.602	1.415	1.748	1.950	1.700
	高等学歴(131)	2.351	1.723	1.690	1.809	1.654	1.679	1.572	1.509	1.380	1.565	1.920	1.992
	有意確率	0.691	0.430	0.532	0.853	0.950	0.558	0.921	0.085	0.531	0.056	0.736	0.005
父職業	異職	2.378	1.739	1.716	1.829	1.634	1.727	1.583	1.560	1.375	1.615	1.918	1.858
	同職	2.451	2.500	2.000	2.000	2.083	2.000	1.560	1.593	1.522	2.364	2.167	2.000
	有意確率	0.546	0.111	0.423	0.479	0.160	0.619	0.741	0.818	0.021	0.001	0.125	0.761
就業形態	雇用希望(207)	2.423	1.722	1.730	1.762	1.681	1.725	1.624	1.528	1.389	1.589	1.930	1.869
	自営希望(56)	2.205	1.936	1.715	1.929	1.536	1.643	1.414	1.655	1.442	1.857	1.946	1.875
	有意確率	0.039	0.039	0.875	0.149	0.128	0.483	0.003	0.046	0.410	0.018	0.876	0.960

注：()内はNをあらわす。「父職業」では、職業クラスタ毎にNが異なるため、ここでは省略している。

表5 年齢・地位アスピレーションと職業選好の相関

		公務員系	芸術系	技能系	建築系	プロフェッション系	警察系	事務系	製造・販売・サービス系	現場系	農業系	教育系	研究系
年 齢	相関係数	-0.137	0.191	0.135	-0.029	0.109	-0.003	0.105	0.125	-0.013	-0.188	0.103	-0.062
	有意確率	0.027	0.002	0.030	0.642	0.079	0.963	0.093	0.044	0.832	0.002	0.096	0.319
		N	262	261	260	261	262	262	259	260	259	262	262
地位アスピレーション	相関係数	-0.027	0.008	-0.051	0.004	0.185	0.133	0.095	-0.133	0.094	-0.021	-0.122	0.161
	有意確率	0.665	0.892	0.415	0.951	0.003	0.031	0.127	0.031	0.130	0.736	0.047	0.009
		N	263	262	261	262	263	263	260	261	260	263	262

攻、父学歴、父職業、希望就業形態別に各職業クラスタの選好の平均値をみたもの、表5は年齢、地位アスピレーションと各職業クラスタの選好の相関をみたものである。

なお、ここでもちいる父親の職業変数は、各職業クラスタについて父親がその職業についているかそうでないかの2分類である。例えば、公務員系クラスタで父職業が異職の2.378という値は、父職業が公務員系でない人は、公務員系クラスタの選好の平均が2.378である、ということの意味している。これと同じように、「同職」の2.451という値は、父職業が公務員系の人は、公務員系クラスタの選好の平均が2.451である、ということの意味している。すなわち、この変数と各職業クラスタの選好との関連から、本人は父親と同じ職業を選好するかどうかをみることができる。

(2) 分析結果

表から得られる知見を述べておこう。まず、属性変数と職業クラスタの選好の関連から。男女で職業クラスタの選好に有意な差がみられるのは、技能系、現場系、農業系、研究系のクラスタである。現場系、農業系、研究系は女性よりも男性のほうが好んでおり、反対に技能系は女性のほうが好んでいる。専攻別では、技能系、現場系、農業系、教育系、研究系で職業クラスタの選好に有意な差がみられる。文系学生は理系学生より技能系や教育系を好み、理系学生は文系学生よりも現場

系や農業系、研究系のクラスタを好むようである。父の学歴は、研究系クラスタの選好と関連している。父の学歴が高い人は、そうでない人よりも研究系クラスタの選好が高いようである。年齢と職業クラスタの選好の間に相関があるのは、公務員系、芸術系、技能系、製造・販売・サービス系、農業系のクラスタである。年齢が高い人ほど芸術系、技能系、製造・販売・サービス系を好み、低い人ほど公務員系、農業系を好む、という関係がみられる。

次に、意識変数と職業クラスタの選好の関連をみてみよう。希望就業形態別では、事務系や農業系の選好に有意な差がみられる。自営より雇用を希望するものは事務系、雇用より自営を希望するものは農業系を好むようである。地位アスピレーションと選好の間には、プロフェッション系、警察系、製造・販売・サービス系、教育系、研究系のクラスタにおいて相関がみられる。地位アスピレーションが高い人ほど、プロフェッション系、警察系、研究系を好み、低い人ほど製造・販売・サービス系、教育系を好む、という関係がみられる。

ここまでは、一般的に考えられうる結果である。しかし、次の2点については注意深く考える必要があると思われる。

1つめは出身地域に関して。一般的に、郡部と市部では好まれる職業が異なると考えられる。例

えば、吉川 (2001) は地域移動の議論の中で、「地域によって好まれる職業」について言及している。しかし表3では、出身地域による職業選好の違いがみられなかった。すなわち職業選好には、出身地域は関連しないということである。これは吉川のいう内容とは異なり、非常に興味深い結果だといえる。この点に関する詳しい議論は別稿に譲ることとし、ここでは結果を記述するだけにしておく。

2つめは父職業に関して。小川・田中 (1981, 1985) は、父親の職業が専門的職業の場合、その子どもも専門的職業に就こうとする傾向があることを明らかにしている。しかし分析において父の職業は、現場系、農業系クラスタに関連がみられるだけであった。父の職業が現場系、農業系の人、父の職業がそれら以外の人よりも現場系、農業系の選好が高いようである。ただし、父職業の数が非常に少ないため、注意を要する¹⁴⁾。

4.2 職業価値志向と職業選好

(1) 「職業に求めるもの」によって選好に違いがあるか

属性・意識変数と選好の関連は大まかに把握できた。次に、3.2で新たに得られた職業価値志向が、職業選好にどう関連しているのかをみていこう。職業価値志向ごとにこれを確かめたものが、表6である。表6は、各職業価値志向を重視する

グループと重視しないグループの職業クラスタの選好スコア平均の差を求めたものである¹⁵⁾。例えば、経済性軸で公務員系の0.178という数値は、経済性を重視するグループの公務員系クラスタの選好スコアの平均値と、経済性を重視しないグループの選好スコアの平均値と間には0.178の差がある、という意味である。すなわち、数値の絶対値が大きいほど、その志向と職業クラスタの選好の関連が大きいことをあらわす。なお、ここでいう「重視するグループ」とは各職業価値志向スコアの上位50%の人をさし、「重視しないグループ」とは各職業価値志向スコアの下位50%の人をさしている。

(2) 分析結果

分析の結果を職業クラスタごとにみていこう。まず公務員系クラスタの選好であるが、経済性、共同性が関連している。経済性、共同性を重視している人は、そうでない人に比べ公務員系クラスタの選好が高いようである。経済性項目の中でも特に収入や雇用の安定性を重視している人が、公務員系を好んでいるためこうした結果になったのではないかと考えられる。

芸術系クラスタの選好には、責任性が負に関連している。責任性をあまり重視しない人が、重視している人よりも芸術系の選好が高い。自分の仕事に社会的責任が伴うのを嫌う人が、芸術系を好

表6 各職業価値志向による職業選好の違い (平均値の差)

	公務員系	芸術系	技能系	建築系	プロフ ェッシ ョン系	警察系	事務系	製造・ 販売・ サービ ス系	現場系	農業系	教育系	研究系
経済性	0.178*	-0.031	0.044	0.236*	0.046	0.153	0.076	-0.021	0.121*	0.088	-0.082	-0.039
責任性	0.012	-0.175*	-0.106	-0.100	0.001	0.185†	-0.035	0.024	0.080	0.131	0.070	0.092
オフィス外活動性	0.042	0.100	0.036	0.162†	-0.122	0.046	-0.009	0.057	0.130*	0.320**	0.093	0.065
ルーティン性	0.133	0.031	0.165*	0.151	-0.020	0.014	0.091	0.062	-0.051	-0.046	-0.076	-0.043
専門性	-0.036	0.066	-0.084	0.127	0.164*	-0.077	-0.061	-0.053	0.003	0.111	-0.057	0.538**
対人性	0.026	-0.092	0.084	-0.138	-0.024	0.092	0.045	0.066	-0.084	-0.258**	0.488**	-0.083
共同性	0.167†	0.048	0.178*	0.127	0.058	0.218*	0.033	0.082	0.086	-0.101	0.149†	-0.273**

**p<.01 *p<.05 †p<.10

んでいるようである。芸術系の仕事は、どちらかといえば社会的な責任を負わない、自由なイメージがもたれていると考えられる。

技能系クラスターの選好には、ルーティン性と共同性が関連している。毎日同じ問題を処理し、仲間とするような仕事を好む人は、そうでない人よりも技能系クラスターの選好が高いようである。

建築系クラスターの選好には、経済性とオフィス外活動性が関連している。経済性を重視し、屋外での仕事を好む人は、そうでない人に比べ建築系クラスターの選好が高いようである。

プロフェッション系クラスターの選好には、唯一専門性が関連している。専門的な知識を必要とする仕事がいいと思っている人は、プロフェッション系クラスターをより好むようである。

警察系クラスターの選好には、責任性と共同性が関連している。社会的に負う責任が大きく、皆でやる仕事がしたいと思う人は、警察系クラスターの選好がより高いようである。

現場系クラスターの選好には、経済性とオフィス外活動性が関連している。建築系と同様に、経済性を重視し、屋外での仕事を好む人は、そうでない人よりも現場系クラスターの選好が高いようである。

農業系クラスターの選好には、オフィス外活動性が正に関連し、対人性が負に関連している。しかもこの関連は比較的強い。ものを相手にし、屋外での仕事がよいと思う人は、そうでない人よりも農業系クラスターを好んでいるようである。

教育系クラスターの選好には、対人性と共同性が関連している。特に、対人性との関連は非常に強い。人を相手にすることを重視している人は、そうでない人よりも教育系クラスターの選好が高いようである。

研究系クラスターの選好には、専門性が正に関連し、共同性が負に関連している。その中でも専門

性の関連は強い。専門的な知識を必要とし、一人でするような仕事を好む人は、研究系クラスターを好んでいるようである。

このように、属性とは別に、職業価値志向が多くの職業クラスターの選好と関連をもっているようである。ただし、なかには事務系、製造・販売・サービス系クラスターなど、職業価値志向とはほとんど関連していないものもみられる。職業クラスターによっては、職業選好と関連をもたない場合もあることには注意しておくべきであろう。

4.3 職業選好の規定要因

(1) 属性・意識か、職業価値志向か

前節まで、属性・意識、職業価値志向と職業選好の関連を別々にみてきた。しかしこれだけでは、職業選好がこれらの変数でどの程度まで規定されるのかまではわからない。本節で、職業クラスターの選好に対する諸変数の影響力をみておくことにしよう。

属性・意識、職業価値志向を独立変数とし、選好を従属変数とする重回帰分析をおこなった。その結果を示したのが、表7である。

(2) 分析結果

分析の結果を、モデルの説明率が高いものについてみていこう。まず、公務員系クラスターの選好には、年齢が負の効果、専攻、経済性、共同性が正の効果をもっている。この中でも公務員系クラスターの選好を規定する1番の要因は専攻である。文系学生のほうが理系学生より公務員系の選好が高く、年齢が上がるほど公務員系クラスターの選好は低くなる。さらに経済性と共同性を重視することで、公務員系クラスターの選好が高くなるようである。

芸術系クラスターの選好には、年齢、父職業、オフィス外活動性が正の効果、責任性が負の効果をもっている。このうち責任性がもっとも芸術系ク

表7 職業選好の規定要因（標準化係数）

	公務員系	芸術系	技能系	建築系	プロフ ェッシ ョン系	警察系	事務系	製造・ 販売・ サービ ス系	現場系	農業系	教育系	研究系
女0：男1	0.049	-0.051	-0.097	0.109	0.011	0.112	0.114	-0.001	0.311**	0.093	-0.002	0.117
年齢	-0.217**	0.177*	0.100	-0.021	0.086	-0.034	-0.038	0.094	-0.031	-0.125	0.087	-0.054
郡部0：市部1	0.072	-0.010	-0.025	0.001	0.021	0.031	0.043	-0.009	0.088	-0.004	-0.113	0.027
理系0：文系1	0.304**	0.143	0.091	-0.106	0.073	0.051	0.262**	-0.004	-0.099	-0.247**	0.057	-0.087
自営0：雇用1	0.099	-0.138	-0.050	-0.105	0.011	-0.012	0.081	-0.186*	-0.043	-0.080	-0.020	-0.002
地位アスピレーション	-0.073	0.104	0.006	0.067	0.238**	0.118	0.138	-0.123	-0.007	-0.114	-0.224**	0.076
初等・中等0：高等1	0.013	-0.018	0.005	-0.016	-0.008	-0.022	0.014	-0.051	-0.012	-0.112	0.015	0.178*
異職0：同職1	0.044	0.175*	0.008	0.025	0.187**	0.026	-0.024	-0.024	0.144*	0.095	0.079	-0.012
経済性	0.173*	-0.039	0.074	0.115	0.013	-0.062	0.076	0.005	0.050	0.011	0.022	-0.091
責任性	0.092	-0.218**	-0.126	-0.236**	-0.112	0.059	-0.079	0.009	0.046	0.009	0.111	0.038
オフィス外活動性	0.042	0.187*	0.144	0.143	-0.096	-0.012	0.033	0.095	0.129	0.180**	-0.011	-0.006
ルーティン性	0.032	0.009	0.027	0.137	-0.054	0.001	0.136	0.137	0.086	0.064	-0.124	0.077
専門性	-0.028	-0.012	-0.004	0.216**	0.179*	-0.001	-0.009	-0.009	0.064	0.055	-0.005	0.288**
対人性	-0.086	-0.072	0.104	-0.035	0.006	0.036	-0.007	0.058	-0.108	-0.049	0.329**	0.028
共同性	0.142*	-0.066	0.051	0.094	0.105	0.219**	0.021	0.060	0.122	-0.036	0.066	-0.064
R ²	0.095**	0.108**	0.034	0.078**	0.070*	0.014	0.026	0.023	0.194**	0.195**	0.175**	0.127**

** $p < .01$ * $p < .05$

ラスターの選好に影響を与えている。父親が芸術系の人ではそうでない人よりも芸術系を好み、年齢が上がるほど芸術系クラスターを好む。さらに、責任を負うことを嫌う人、オフィス外での活動を志向する人ほど芸術系クラスターの選好が高くなるようである。

建築系クラスターの選好には属性の影響は見られず、責任性が負の効果、専門性が正の効果をもっているだけである。これらの強さはあまり変わらない。属性に関係なく、責任性を嫌い、仕事の専門性を志向する人ほど建築系クラスターの選好が高まるようである。

プロフェッション系クラスターの選好には、地位アスピレーション、父職業、専門性が影響している。父の職業がプロフェッション系ならばよりプロフェッション系クラスターを好み、高い地位や仕事の専門性を重視する人ほどプロフェッション系クラスターの選好が高くなるようである。父職業に関して、属性と選好の関係をみただけでは小川・田中（1979）のいう父職業と本人職業の関連はみ

られなかったが、ここでその関連を確認することができる。彼らのいうように、専門職の場合父職業の継承傾向があるといえる。

現場系クラスターの選好には、職業価値志向の影響はみられず、性別・父職業のみが影響している。特に性別は、現場系クラスターの選好を規定する大きな要因となっている。本人の職業価値志向にかかわらず、男性であり、父の職業が現場系の人であれば、より現場系クラスターの選好が高くなるようである。

農業系クラスターの選好には、専攻とオフィス外活動性が影響している。このうち、専攻のほうがより強い影響を与えている。理系学生であればより農業系クラスターの選好が高くなり、オフィス外活動での活動を志向する人ほど農業系職業クラスターの選好が高くなるようである。

教育系クラスターの選好には、地位アスピレーションが負の効果、対人性が正の効果をもっている。特に対人性は、教育系クラスターの選好に対して非常に大きく影響している。このことは、若林

ら（1983, 1986）の研究結果とも一致している。高い地位を求めず、人を相手にする仕事を志向する人ほど、教育系クラスターの選好は高まるようである。

研究系クラスターの選好には、父学歴・専門性が影響を与えている。特に専門性は、研究系クラスターの選好を大きく規定する要因となっている。父の学歴が高い人のほうが研究系クラスターを好み、専門的な仕事を志向する人ほど研究系クラスターの選好は高くなるようである。

(3) 職業選好への影響の与えかた

ここまでの結果を、選好に影響を与える変数の違いから3つに分けてまとめよう。まず、属性や意識変数が職業クラスターの選好にもっとも影響しているものとして、公務員系やプロフェッション系、現場系をあげることができる。公務員系クラスターには年齢と専攻、プロフェッション系クラスターには地位アスピレーションと父の職業、現場系クラスターには性別と父の職業が強く影響している。これらの職業クラスターの選好には、個人のもつ職業価値志向よりも属性や意識のほうが影響をあたえているようである。

職業価値志向が職業クラスターの選好にもっとも影響しているものとしては、芸術系、建築系、教育系や研究系をあげることができる。芸術系には責任性とオフィス外活動性、建築系には責任性と専門性、教育系には対人性、研究系には専門性が職業クラスターの選好に強く影響している。先の場合とは異なり、こちらは本人の属性や意識よりも、職業価値志向が職業クラスターの選好に影響しているのである。このことから、属性だけでなく「自分の職業に求めるもの」も職業選好の重要な要因となっていることがわかる。

最後に、ここで挙げられている変数では説明しきれないものとして、技能系や警察系、事務系、製造・販売・サービス系がある。若林ら（1983,

1986）の研究では、事務的専門職、販売・現業職と職業志向の関連が言われていたが、本稿ではその関連は確認できなかった。しかも、決定係数をみればわかるように、ほかの職業クラスターと比較してモデルの説明率が低い。すなわち、これらの職業クラスターの選好には、本稿で扱っている以外の変数の影響が大きいと考えられる。

5 おわりに

本稿の分析は、現代大学生の職業選好の要因を明らかにすることを目的としていた。分析から分かったことをここにまとめておこう。

(1) 調査対象者の職業選好をもとに、公務員系、芸術系、技術系、建築系、プロフェッション系、警察系、事務系、製造・販売・サービス系、現場系、農業系、教育系、研究系という12の職業クラスターが得られた。この職業クラスターは、旧来の標準職業分類、SSM分類よりも専門職・ホワイト職がより細かく分類されているものであった。

(2) 若林らがもちいた尺度に修正を加え、新たに経済性、責任性、対人性、専門性、オフィス外活動性、ルーティン性、共同性という7つの職業価値志向が得られた。これらは、仕事で得られる経済的・社会的報酬と仕事の特徴をあらわすものであった。

(3) 得られた職業クラスター・職業価値志向から、職業価値志向と職業クラスターの選好との関連を明らかにすることができた。職業クラスターごとで選好に影響する変数は異なるが、多くの関連があることが分かった。特に、教育系クラスターの選好に対する対人性、研究系クラスターの選好に対する専門性の影響は強いものであった。ただし、中には属性や意識、職業価値志向に影響されない職業クラスターがあることもわかった。

以上から、本稿の目的はある程度達成されたといえる。ただし、本稿の議論が十分なものという

わけではなく、課題も残されている。具体的にいえば、4. 2では出身地域による職業選好の違いがみられなかったが、これに関してより綿密な議論をおこなう必要がある。また、若者が「就きやすい」職業を好む、というパターンも考えられることから、職業価値志向もさらに吟味していく必要があると考えられる。これらが本稿に残されている課題といえよう。今後はこうした課題を整理していき、今日の若者の就職を取り巻く状況をさらに明確に描き出していきたいと考える。

〔注〕

- 1) 本稿では、個人は選好する職業を選択するものとしている。厳密に言えば、職業選択と職業選好が異なる可能性もある(岡本 1972など)。例えば、「理想としてはこの職に就きたいが、現実にはつけないので違う職を選ぶ」といった場合である。しかし、大学生の職業選択を扱うため、実際就くことになっている職業をきくには限界がある。そのため本稿では、個人は選好する職業を選択するものと想定して議論を進めていく。
- 2) この調査は2003年の11月から12月にかけて、主に授業やサークル団体に配布する形式で行った。調査対象の概要は以下の通りである。
有効回答数：267
性別別 男性：138、女性：128(無回答：1)
学年別 1回生：77 2回生：56 3回生：58 4回生：69 修士1回生：4 修士2回生：3
専攻別 文系：121 理系：144(無回答：2)
出身地域別 市部：178 郡部：80
調査対象は鳥根大学の学生であり、日本の大学生全体ではないことに注意しておく。
- 3) 具体的な項目は、若林ほか(1983)を参照。
- 4) 例えば、大学生の就職と社会移動を論じた藤森俊輔(1983)は、学生の選択した職業のうち、技術者・管理的公務員・事務従事者・教員・科学研究者・薬剤師・医師といった、代表的な職業に限定した議論をしている。
- 5) 選好をたずねた36の職業は、次のとおりである。国家公務員、地方公務員、デザイナー、作家・芸術家、スチュワーデス・客室乗務員、理容師・美容師、料理人、建築士、医師、薬剤師、弁護士、警察官、営業・外交員、経理・人事・総務事務

- 員、会計士・税理士、経営コンサルタント、会社役員、小売店の店員、飲食店の店員、食品製造、衣類製造、看護師、デイサービス・ホームヘルパー、消防士、自衛官、バス・電車・タクシーの運転手、トラック運転手、大工、機械製造・組立・修理、建設工事、電気工事、ソフト開発、農林漁業・畜産業、小・中・高の教員、幼稚園教員・保育士、大学教員・研究者
- 6) クラスタ分析については、安田・海野(1977)を参考にした。
 - 7) 「就きたいと思う」を3点、「就いてみてもいいと思う」を2点、「就きたくない」を1点としてスコア化してもちいている。この際、複数項目からなるクラスタはその項目数で除している。すなわち、どの職業クラスタの選好も、最高3点、最低1点である。
 - 8) ただし、(H) 個人-共同、(I) 専門-非専門、(K) ルーティン-非ルーティンの各項目については、質問の内容が逆であるため、数値を逆転させている。
 - 9) 項目それぞれについて、「そう思う」「重要である」に5点……「そう思わない」「重要でない」に1点を与え、スコア化してもちいる。経済性軸・責任性軸はスコアを3で除し、すべて5点満点となるようにしている。
 - 10) 調査では、「高い地位につきたいと思う」「他人との競争に負けたくないと思う」という質問について、あてはまるかどうかをたずねている。これをもとに、「当てはまる」に5点……「当てはまらない」に1点を与え、両項目の合計値を地位アスペクション尺度としている。
 - 11) 鳥根大学は、法文、教育、総合理工、生物資源の4学部から構成されている。専攻は基本的に法文・教育(文系)=文系、教育(理系)総合理工・生物資源=理系としている。
 - 12) 希望就業形態に関して、調査では、「自営業」「民間企業」「公務員」の3つにそれぞれ順位をつけてもらっている。これを用いて、自営業の順位が民間企業・公務員より高ければ自営希望、そうでなければ雇用希望としている。
 - 13) 父学歴変数の分類は、以下の通りである。
初等・中等学歴…中学校、高等学校
高等学歴…専門・専修学校、高等専門学校、短期大学・4年制大学・大学院
 - 14) 父職業変数のNは次の通りである。
表を見ればわかるように、父の職業には偏りがある。特にプロフェッション系や研究系など、小

補表 父職業が同職の度数

公務員系	芸術系	技能系	建築系	プロフェッション系	警察系
41	2	3	11	4	2
事務系	製造・販売・サービス系	現場系	農業系	教育系	研究系
60	9	60	11	21	3

川・田中（1981, 1985）のいう専門的職業の数が少ない。

- 15) 表6の検定結果は、セルごとについて T 検定をおこなった結果を示している。すなわちここでは 12（職業クラスター）× 7（職業価値志向）回の T 検定をおこなっている。

〔文献〕

安達智子, 2003, 「大学生の職業興味形成プロセス」『教育心理学研究』51: 308-318.
 ———, 2004, 「大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援」『日本労働研究雑誌』533: 27-37.
 土井聖陽, 1996, 「人にとっての職業」佐々木土師二編『産業心理学への招待』有斐閣ブックス, 65-93.
 藤森俊輔, 1983, 「教育と社会移動—大学生の職業選択調査」『岡山大学教養部紀要』19: 45-70.
 玄田有史, 2001, 『仕事の中の曖昧な不安—揺れる若年の現在』中央公論新社.
 堀 洋道・山本真理子・松井 豊編, 1994, 『心理尺度ファイル—人間と社会を測る』垣内出版.
 片桐雅隆, 1976, 「職業選択の理論」『組織科学』10(1): 66-74.
 吉川 徹, 2001, 『学歴社会のローカルトラック—地方からの大学進学』世界思想社.
 宗方比佐子, 2001, 「職業興味に関する実証的研究 (1)」『桜花学園大学研究紀要』(3): 49-55.
 小川一夫・田中宏二, 1979, 「父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響」『教育心理学研究』27(4): 272-281.
 岡本英雄, 1972, 「職業イメージと職業選択」『職業研究所研究紀要』3: 73-87.
 奥津真理, 2001, 「職業的自己の評価と関心の状況」『産業・組織心理学研究』14(2).
 ———, 1979, 「職業分類と社会」『ソフィア』28(4): 408-424.
 神原清則, 2000, 「大学卒業生の就職と会社への初期適応過程—新構想キャンパスの卒業生動向調査」『日本労働研究雑誌』479: 20-27.
 鹿内啓子・後藤宗理・若林 満, 1986, 「女子短大生の就職決定・未決定に対する原因帰属—自己概念の影響について」『名古屋大学教育』学部紀要』33.
 田中宏二・小川一夫, 1981, 「職業継承性と親子関係—教師職・公務員職における娘の職業継承」『年報社会心理学』22: 163-178.
 ———・———, 1985, 「職業選択に及ぼす親の職業的影響—小・中学校教師・大学教師・建築設計士について」『教育心理学研究』33: 173-178.
 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子, 1983, 「職業レディネスと職業選択の構造」『名古屋大学教育学部紀要』30: 63-68.
 若林 満・後藤宗理・鹿内啓子, 1986, 「女子短大生における性役割社会化と職業興味」『名古屋大学教育学部紀要』33: 173-212.
 若林 満・後藤宗理・宗方比佐子, 1989, 「女子学生の職業興味と職業選択」『名古屋大学教育学部紀要』36: 1-32.
 Williams. W. M., 1974, *OCCUPATIONAL CHOICE*, George, Allen & Unwin Ltd. Publishing Inc. (=1980, 吉井 弘訳, 『職業選択の理論』誠信書房.)
 安田三郎・原 純輔, 1982, 『社会調査ハンドブック 第3版』有斐閣双書.
 安田三郎・海野道郎, 1977, 『社会統計学』丸善.
 安田 雪, 1999, 『大学生の就職活動』中公新書.